

オフィス・オートメーションに関する一考察

遠 藤 貞 一

先ず一般的に云って次の社会は脱工業化社会であり、それは知的産業化時代であると云われている。それに対して我国では奈良の生駒市でレーザー光による通信技術の実験が始まっている。

それは髪のような1本のガラス繊維が何千本の銅線の束に匹敵するもので、光そのものは無音メカなしに瞬間に画面、文字面がとれる見込みの技術である。これは当然近い将来の「超高密度情報化社会」が眼前に出現しかかっているということである。そしてこれは必ず「超高密度選択情報社会」へと移行し、情報氾濫は解決された時代となる。そしてその選択情報によって、新しい社会バインダーの社会が出現する。こゝで科学文明の姿が一変した社会となる。

この80年代は丁度そのような、かつて歴史にあり得なかつた時代への入口に立っており、その社会バインダーの主要な1つとして、こゝにオフィス・オートメーションが出現してきたものと見ることが出来る。

これは1つの哲学的な分析であり、これは多くの論説を誘導するものであるが、我国では昨年1979年11月にオフィス・オートメーション学会（会長谷村裕）が設立された。

オフィス・オートメーションの1つの定義として「オフィス・オートメーションとは、従来のデータ処理技術では扱いにくかつた非常に大量かつ構造の不明確な業務に対し、コンピュータ技術、システムズ・サイエンスおよび行動科学を適用することを意味する」とある。

これはオフィス革命の1モデルとして説明すると、たとえばデスク上には、パーソナルコンピュータ(電話器代り)、モニターテレビ、情報ファイル(レーザー光線利用)、エレクトロメール機(書類の自動作成)、ファクシミリ、自動テレタイプなどが整然と並べられ、ノンペーパーである。そしてそれを操作する人間はハイレベルで、高い教養と相応な技術が望まれる。そして場合により無人であり得る。

従って人間はオフィスに姿を見せることが、それ程重要でなくなる。その結果全社員の労働時間を一定化する必要もなくなる。また部課毎の部屋割、資料室、メインルーム、倉庫も不用となる。事務部門は管理センターに集められ、特別のマネージャーで業務が遂行される。そして一般社員は、機械化の効かない人間的部門に従事、各自の結果は端末でコンピューターに入力される。

そしてこのオートメーション機器は、人間の仕事を排除するものでなく、逆に人間の仕事を増加するためのものである。しかも人間の真に人間らしい仕事に従事させるためのものである。

このような機器の存在によってのみ、新しい人間間の新しいバインダーの「支配のない新しい社会」が実現可能になってくるものと考ええる。

この超密度選択的情報化社会は、先ず現代の「物質取引きの社会」の生産性を超高度に高め、その結果として新しい知識産業化社会の営存の基盤を高め、相互プラスの関係で、その新しい情報化社会へと移行してくる。そして人間のより人間らしい社会へと移行してくるのである。

そしてその新しい社会構成のバインダーは、端的に言えばごまかしの効かない社会へと移行するということである。これを平たく言えば、たとえば個人の失敗は即データとなり、個人の功績もデータとなって現われる。このことは次第にごまかしの効かない社会へとなってくることで、集団指導性、おみこし経営、ファミリー経営などの責任逃れの態勢が効かなくなり、責任が細分化され逃げ口上が効かなくなる。

このことは一切の悪事、ワイロ、日本人らしい根廻し、腹芸、寝業、肩たゞきなども一切通じなくなってくる。そしてこれは当然、政治の様相も一変させてくる。

このようにオフィス・オートメーションの社会は次第に進んでくるであろうが、それでは現在のオフィスの状況は一体どうなっているのかを、一応内容分析の立場から見てみることにする。

そこで先ずその中で最も大きな役割を占めるコンピュータを取上げる。そしてこの世界を内側より分析して、現状としての1つの極端な表現を試みると、一口に云ってこれまでのコンピュータは、成功しているのは大型、超大型のみで、他はうまくはいってはいない、大衆化使用の方向では、特にまだ極めて不十分の状況である。

所がこのコンピュータの別の意味、社会のよいバインダーとなるという社会性の意味では、後者の大衆化コンピュータの方が、桁違いに高い意義をもっているのである。そしてこの言語の大衆化は現実的には既に進行中なのである。

その1つはアメリカのマサチューセッツ総合病院で、現在のコンピュータ言語は、色々な理由(この中に虫取りの猛烈な面倒さも含まれている)で到底医療には使えないということから、新しいコンピュータ言語の開発が開始された。所が途中で紆余曲折はあったが、これは一般にも極めてよく使えるということから、改めて政府の莫大な投資により、こんどはコンピュータの専門家による改造が行われた。かくてこれが従来のコンピュータ言語に対し、桁違いに秀れている、虫取りも簡単で、木構造に秀れ、性能も桁違いで、大衆性も具えているということから、1977年アメリカ政府の標準局(ANSI)から、おびたゞしいコンピュータ新言語を退けて、第1言語をコボール、第2言語をフォートラン(を古典?とし)、第3言語を「MUMPS マンプス」として世界に向かって宣言した。

かくてMUMPSは、コボールなどとは比較にならぬ高性能の新言語として、80年代に登場し始めたと思われる。それはこれから未来のコンピュータの世界語はこれで行くというニュアンスが感じられるのである。

所がこの大衆性ということでは、夙にアメリカのダートマス大学で開発された「BASIC」言語が、略々アメリカ社会に定着して来たのである。そしてこの事情は我が日本でも同様で、主としてマイクロコンピュータの世界に拡がって来た。

所が我が日本でまた1つの極めて注目すべき異変が起って来た。それは日本銀行の1社員による「Definition Language」とも云うべきものが開発されて来たのである。

すなわちそれは、例えば銀行における経済統計の業務で、従来の言語で1年かゝるプログラミングが、数日で片付くという驚くべきものである。それは簡単に云えばその面倒なプログラミング自体がなくなって、直接そのデータベース図表をいきなり2文字の命令語で出現させ、且つその表そのものを如何様にも変形、計算するという技術である。従ってこゝでは管理図表そのままを、色々に料理して使用するという事である。

そしてこれは勿論マイクロコンピュータ操作を可能とし、大衆性の条件を持つ、これからの言語と云える。これは現在、彼と彼をとりまく小数の若者によって推進されつつあるが、一応「P I P S」= PAN INFORMATION PROGRAMING SYSTEM と命名されている。

そこで筆者はこれから80年代の大衆性を荷う言語として、MUMPSとP I P Sがどのような歴史を迎るかに注目している所である。

このようにコンピュータの世界も、先ずレーザー通信技術と、大衆性をもった言語で、従来のものとは全く異質の状態に進展を開始するものと見られるのである。

そこでこれからのオフィス・オートメーションの世界も、真に大衆に密着した世界へと進展して来るであろうが、そのように情報化社会が、安価、容易に超密度へと進んで来ると、こゝに本格的に登場してくるのは、これまで背景としての科学—たとえばシステム科学、SE、行動科学そのもの—現在ではまだ学者、象牙の塔にあるものを巷間に放出する仕事が登場してくる。

そして注意すべきことは、この仕事そのものが決して容易なものではなく、大きな「大衆性改装」をしなければならぬであろうということである。

そこでこのオフィス・オートメーションの革新は、実はその便利な機器よりも、もっと本質的な「ソフトの問題」が、大型に登場してくるのである。

そして最も注目すべきことは、このソフトこそコンピュータだけでは解けないものであるということである。

こゝに完全に「人間の領域、考ええる領域」の世界が存在し、こゝに人間の生き甲斐が結びつく世界が存在する。この領域の職業に従事する人々は、問題によって幾らでも仕事のある社会が出現してくる。

そしてその人間の「創造思考」の成果によって、過去とは全く異質の「誰でもが生き甲斐のある社会」へと進展するものと考えられる。

80年代の入口はこの望ましき世界への入口と考えたい。そして次に着手すべきことは、オフィス・オートメーションの機器の外、そのソフトへの開発、具体的には先ずその近代科学の粋といわれる、システム科学、行動科学などの「大衆性への改装」の仕事が登場する。差当りこれらの科学のポイントが、大衆の毎日の仕事の行動日記の具体的な計画欄に記載されなければならないのである。

この仕事の手引書を作ること、それ自身だけでも、生き甲斐のない仕事であるだろうか？これで文明社会の人間的結び付きが、より好ましい進歩した形で、具体的に進展するであろうからである。

さてこのように具体的に機器とソフトの素晴らしい発展によって社会を進展させるのはよいとしても、こゝには我々共通の人類のよって立つ基盤＝哲学が確立されていなければならない。

それは人類自体の基本的な問題であるが、我々はその一面を先ず社会倫理の問題として取上げる。即ち社会の主体をなす自由にして尊厳なる個人及び広義の企業は、すべてが「社会のため」という哲学を基本にして、その「社会バインダー」を確立すべきである。社会の共同の幸福を作るため、3000年前から今だに消えない資本主義と、現代の朝市のたのしい純真な人々の姿（徒党を組んで値上げするようなことはない）の中に、我々は未来の「第3の道」を模索しているのである。社会の主体は尊厳なる個人、広義の正しい企業であり、政治ではないのである。

1980年7月